

# 大陸（北支）

## 北支戦線従軍記

兵庫県 寺川 醇

昭和十九年

四月 十一日 河南作戦参加のため東長寿出發南

下す

六月 河南省洛寧に進駐す

八月 河南省臨汝鎮に進駐す

昭和二十年

三月 二十一日 老河口作戦のため臨汝鎮を出發

五月 七日 一一〇八高地に進駐

八月 十八日 臨汝鎮へ帰着

昭和二十一年

三月 十六日 洛陽を出發

二十九日 上海を出發

四月 二日 山口県仙崎に上陸、復員完了

私は大正十年八月十六日、兵庫県朝来郡和田山町に  
生まれました。

以下に私の軍歴の概要を申し述べます。

昭和十七年

四月 一日 召集で姫路中部四六部隊応召

七月 二十日 姫路出發

二十八日 北支河北省新樂県東長寿へ到着

北支派遣鸞第三九〇八部隊第六中

隊へ転属

## 故郷に帰る

応召時の私の家庭は農業を営んでおり、家族構成は父・母・姉・私・二人の弟でした。

私が応召の折には、我が町から三人の応召者があり、神社で壮行会があり、私が代表で挨拶して、家郷の期待に応じて善戦力闘しますと申しました。旗の波と大合唱に送られて列車で姫路へ出発、無事入隊し新兵教育に励みました。周知の通り毎日の朝夕ビンタを喰らい、内務班教育の厳しさを体に叩き込まれました。野外の訓練で特に苦しさを忘れないのは、川原の石ころの上での匍匐前進でした。私は軽機の射手でありましたので、あの重い十一年式の銃を両手で水平に持ち、肘と膝の匍匐にはもう悲鳴をあげる寸前でした。

服装検査、兵器検査、軍装検査とまた気合の掛けられ通しで、在郷では味わえない苦痛に満ちた新兵期間を涙を流し歯をくいしばり、故郷を出る時の家族、友人、町民の激励を思い起し、これも御国のためと頑張ったことでした。この新兵時代の筆舌に尽くせぬ苦勞

のおかげで、戦地での危険や難局を乗り越え、また復員後の祖国再建に非常な努力を尽くした軍人精神の発揚等へと直結したと思います。古人曰く「玉磨かざれば光なし」と。

昭和十七年七月北支へ来てから、駐屯地付近の討伐や戦闘で、中隊長福永勉大尉をはじめ下士官四人の戦死者が出ました。勿論負傷者も数多く、主として中共抗日軍主力の八路軍相手の損害です。この外に新四軍も抗日軍として日本軍を悩ませました。

一般的な戦場の悲惨さ、風土特有の環境の例を語りますと、雨期の追撃作戦中、敵も味方も人も馬も雨と汗と泥で顔も何もかも真っ黒で、戦場の至る処に死体が散乱しておりました。馬は腹が丸く膨れ上がるくらい膨張して四肢を開いて突っ張りながら転んでおり、人間もほとんど丸裸に近くて敵味方の区別さえ分かり難く、また人も馬も、目、口、鼻等の身体の穴という穴からは蛆虫がわいており、臭気芬々として文字通り地獄絵図さながらの状態でした。

また、民家に入った時、ふと自分の足元を見ると、

靴から巻脚絆にかけて次第に色が黒っぽくなっていき  
ます。「変だなあー」と思つてよく見ると、それがだ  
んだん上へ上へ上がつてくるのです。何かの陰か？と  
なおよく見ると、なんと蚤の大群、しかもそれが米粒  
大の大きい奴ばかり、思わず手で払い落とすことが  
ありました。またある時は一天にわかにかき曇つたの  
で見ると、あちこちで農夫達が「ホーホー」と叫んで  
旗やら手やら振っています。そこで一天にわかにかき  
曇つた物の正体を見つめると、なんとそれがバッタの  
大群。それも千や二千ではない、恐らく何万か何十万  
いや何百万という数知れない大群で飛来していたので  
す。そのバッタの大群が飛び去つたあとの畑や野原  
は、農作物も草も見るとなく、無残に喰ひ荒らされ  
ていました。とにかく気味の悪い嫌な国へ来たと、ぞ  
っとしました。

水についてですが、大陸は日本内地では想像出来ぬ  
くらい水が悪く不自由でした。それ以上に衛生設備が  
劣悪、加えて作戦終了後は全員の体力低下、士気もま  
た低下していたのか、下痢患者が続発し、アマーバ赤

痢等で病死者が多発しました。日夜その対策で戦闘以  
上の苦勞をしましたが、結局はなんら良い決定打もあ  
りません。そんな中で一個分隊だけ妙に皆元気で赤痢  
患者も出ないので、その訳を聞くと「皆でニンニクを  
食べております」とのこと。改めてニンニクの効力に  
最敬礼をしました。

予鄂作戦とは別名を老河口作戦とも言い、在支米空  
軍の根拠地である老河口の飛行場覆滅がその主要な目  
的でした。その当時（昭和二十年三月より終戦まで）  
北支方面軍には制空権も飛行機も何もなかったので、  
軍の上層部ではこれを素手で飛行場を取りに行くよう  
なものとっていた由ですが、私達は一切知らずただ  
次々と下される命令の通りに動くのみでした。

私達の心の拠り所としては、「京漢作戦を経験した」  
とのことで、進攻作戦とはこんなものであると、ある  
程度は分かっているということでした。後になって、  
これがあの苛酷、凄惨な戦いを六カ月の長い間続行す  
ることになるとは、神ならぬ身、誰一人知らぬこと  
でした。

私は第六中隊では軽機の射手でした。日本軍の十一年式軽機は重くて故障が多く、散々悩まされました。

敵のチェッコ式軽機関銃は憎らしい程故障がないことを京漢作戦の戦利品として経験していました。その上敵は弾丸も無尺蔵に持っています。今度の作戦にはチェッコ式を持って行ったのでいろいろと重宝し、日本も何故もつと兵器の改良をしないのか、やればもつと楽に勝ち戦が出来るのに！と思ったのは私一人ではなかったはずです。

戦闘の苛烈さを偲ぶのに、第一一〇師団長閣下の木村経廣の歌「龐家砦陣地確保部隊に対して」を紹介します。

弾丸も尽き 手榴弾も尽き 石投げて

戦うと聞き なみだす われは

この作戦は、我が師団を一举に撃破して黄河に圧迫し撃滅しようとする敵が企図していたのに対し、たまたま我が師団が積極果敢に突進作戦を敢行したためその企図が封殺されたものです。これは特筆に値する戦果で、我が師団はこれによって依然として主動の地位を

確保しただけでなく、支那事変、大東亜戦争を通じて「寡を以て衆を制す」唯一の戦例として永く戦史に残るであろうと思われる作戦になりました。

また、第六中隊は五月四日より一一八〇高地の攻撃を始め、五月六日の夕刻に最後の突撃を敢行して同高地を完全占領し、歩兵第一六三連隊（松江）を救出するという偉勲をたてました。

しかし一方、空を見れば制空権は完全に在支米空軍が握っており、私達の行動は夜間に限られてしまい、行動の難しいことこの上もありませんでした。

なおこの京漢作戦と予鄂作戦がどのくらい苛烈な戦闘であったかといえば、まず敵機が跳梁して爆撃、銃撃、焼夷弾戦法をとり、敵味方の戦車を駆け回り、また敵味方の砲兵が壮烈な砲兵戦を展開するかと思えば、双方の野戦重砲が咆哮するといったようにまさに力と力の激突で、河北の戦場とは全くその様相を異にして凄まじい限りでした。

また山砲兵中隊の闘魂も私等歩兵に負けず劣らず凄まじく、あの重い山砲を分解搬送で私等と同じように

高い山の頂上まで担ぎ上げ、「山砲頑張れ」を合言葉として、互いに励まし合いながら協力してくれたのはただただ頭が下がるのみでした。

歩兵の一個中隊が突撃をして中隊長以下死傷者続出し、全滅に近い打撃を受けても、なお屈せず突撃をするという中隊は二、三にとどまりませんでした。

南召県城で日本の敗戦を知った時のショックは大変でした。私達は連戦連勝であるし、祖国の必勝を信じ、まだまだこれから戦い抜く覚悟であったのに、青天の霹靂とはこのことか、否それ以上の大ショックで形容出来ないくらいでした。何しろ有史以来の出来事でしたから。

嗚呼！ 天なる哉、命なる哉、我等が武運、ここに窮まれるか、天を仰ぎ地に伏し、慟哭慷慨なす術を知らず。死して護国の鬼となり悠久の大義に生きんか、生きて虜囚の辱めを受け祖国の再建に志さんとするや、涕淚滂沱その尽きる所を知らず。憤りと悲しみ、怒りと落胆、放心と自暴、そして誰に向けてよいのか不満と苦衷、それらの入り混じった複雑な心境の後、

祖国の将来を憂う私達でした。

ここで第一〇師団の老河口作戦戦史より敵將の談話を紹介します。

上海南京方面警備司令官湯恩伯將軍は、「自分は京漢作戦の時、第一〇師団正面の中国軍を指揮していたが、日本軍のためにコテンコテンにやられ危うく一命を落とすところだった。あんな酷い目に遭ったのは生まれて初めてだったが、一体あの時貴師団は、どういうふうに作戦を指導されたのか。後学のために教えていただきたい」と木村師団長の手を握り、「閣下の師団は在支日本軍中随一の勇敢な師団であったが、軍紀は厳正で、対村民衆軍紀もまた良好だった。それで閣下は戦犯でないからどうぞ日本へお帰りください。長いことご苦勞でした。今後とも日中友好のためによろしくお願い申し上げます」と。結果木村師団長は、師団長級では一番早く内地へ帰られた。

日本が無条件降伏して一週間目の八月二十一日、我が師団正面の敵第一戦区副司令官斐昌閣中将は、木村師団長に対して「師団將兵の極めて勇敢にして且つ軍

紀至敵なることに對し敬意を表すと共に、對民衆軍紀もまた良好なるをもつて、師団將兵の中から戦犯者は一人も出さないことを約束する」と第一戦区軍司令長官胡宗南將軍の意図を伝えた。

また、八月下旬、我が軍司令部より、中国側の命令があれば下士官兵を勞務に服せしむるよう命令あり、師団長は中国側の命令で下士官兵を勞務に服せしむるよりも、むしろ公共民衆のためになる作業（道路・鐵道・橋梁等）ならば当方より進んで自主的に実施せしむ、と思ひ斐副長官を訪ねしところ、「厚意はありがたきも、第一〇師団將兵は俘虜と見做さず、客分として扱ふよう胡長官より命ぜられたるをもつて、中国側は貴師団の下士官兵を勞務に服せしむる考えは毛頭なし」と答へたり。

以上の通り第一〇師団將兵が極めて勇敢で、軍紀厳正且つ對民衆軍紀も良好であつたことは、敵將がハッキリと太鼓判を押しているところです。

一日千秋の想いで待ち侘びていた私達に、いよいよ帰国出来るとの見通しがつき、洛陽出發が昭和二十一

年三月十六日と定まりました。

やつと祖国に帰ることが出来る、そして懐かしい肉親の待つ故郷に帰れるという喜びと、亡き戦友達の英霊に對して後ろ髪を引かれる思いやらの複雑な気持ちで洛陽駅に到着。

乗車割り当てを見ると無蓋貨車で、それも一個中隊に一輛の割り当て。すし詰めの限度をこえて身動きも出来ぬ状態でしたが、内地までの辛抱と諦めて乗車しました。無蓋ですので皆の携行天幕を繋ぎ合せて支柱を立て、屋根にしました。その上悲しいことに、私達の列車は臨時列車のためか、時と所を構わず停車。

一度停車すると出發時間も予定出来ません。下痢患者が多いため停車すると、大勢があたり構わず大便をします。途中で発車があるとなりふり構わず列車に走り戻り、便の後始末をしたり尻を拭いたりする余裕ありません。もう笑うに笑えぬ状況で、まれには衣服を汚し、悪臭を抱えていました。平和な日本内地では想像も出来ぬことです。

私達は戦闘、行軍以外にも種々の苦心に悩まされま

した。走行中の車輛と車輛の連結器の上へ身を構えて  
用便する方法が現れ、動き揺れる連結器もそのうちに  
便で汚れました。中国人の鉄道従業員が「困る」と大  
声で怒鳴り、こちらは「出もの腫れもの所嫌わず」で  
メイファーズ（仕方がない）。今頃考えてもあれは軍  
紀厳正の精鋭でも如何ともしようなしでした。

更に中国兵や住民の掠奪あり、沿線からの投石あ  
り、当方は武器はなしで、天幕の中に身を寄せあい縮  
んでいました。辛抱辛抱。やっと上海到着。三月二十  
七日の出港までを、学校か兵舎か分からぬ建物に収容  
されましたが、人間扱いでなく荷物扱いで窮屈なこと  
この上ありません。忍の一字あるのみでした。

またこの頃になると誰それが戦犯容疑で残されるら  
しいとか、タバコを沢山持っていると言われ乗船出来ないと  
か、写真は全部検閲されて不適当なものは没収の上そ  
の部隊は乗船中止とか、デマやら噂、憶測が飛び交い  
ただでさえ不安な気持ちが一層不安になります。

そんなやるせない思いをしながら、三月二十七日に  
米軍のLSTに乗り、やっとのこと上海を出港。数日

航海の後に内地の陸地、島が見え、皆甲板へ出てきま  
した。「あれは九州の○○○。あれは○○○島の○○○」と  
しきりに説明がありました。LSTは一向停まらず北  
へ北へと走るのみ。「内地を見せ喜ばせといて、実は  
北鮮かソ連へ連れて行くのかも？」と妄想が出て不安  
この上もありませんでした。

多くの話題に包まれて、山口県仙崎港に四月二日よ  
うやく上陸。頭から全身真っ白に消毒されました。復  
員式が終了して故郷へ。

神州の不滅を信じ、大東亜共栄圏の建設を信じ、大  
皇陛下の御為に祖国の為に滅私奉公、ただ命令のまま  
にひたすら戦っていました。志と反して敗戦の憂き目  
に遭い、空しく帰国しました。護国の英霊よ許してく  
れ。

昭和十九年四月十一日行動開始の河南作戦では、強  
行軍につぐ強行軍、夜を昼についで歩きに歩きまし  
た。ここで一番困った事は、空腹でした。食べものが  
ないのです。やっとのことで農家が隠していた粟を見

付け出して小隊で分け合って食べました。塩は岩塩で不自由はありませんでした。とにかく美味く、あの時の栗の味は今だに忘れられません。

昭和二十年三月二十一日からの老河口作戦では、三月三十日の河南省内郷県馬頭山付近の戦闘で前頭頂部軟部貫通銃創を受けました。この戦闘では我が第六中隊は、中隊長坂田弘治中尉以下将校三人負傷、戦死者下士官兵十二人を含み損害は二十四人を出す激戦でした。私の頭の負傷は敵弾が鉄甲を撃ち抜いて上へ回り頭頂部の軟部を貫通し首に突き刺さって止まりました。私は自分で弾丸をつまんで引き抜き、三角巾を巻き、かすり傷で終わりました。もうちょっとのところ即死を免れました。まさに九死に一生を得ました。私は軽機の射手だったので最も狙われていたのか。小隊長は左肩を、分隊長は右眼をやられました。この戦闘でも腹ペコには随分困りました。稀にはソーメンを見付け、アヒルを捕らえ、岩塩で炊いての御馳走でした。今もあの味を覚えています。

八月十五日（終戦の日）河南省南召県留山南方付近

の戦闘では、私は第二回目のかすり傷。手榴弾の破片を右上のアゴの上へ。衛生兵の手当てを受けました。戦死者が二人出ました。残念にも八月十五日の日に死ぬとは！合掌。この八月十五日の夜夕立が降り、びしょ濡れに濡れて大変寒かった記憶が強く残っています。

栄養失調が原因の下痢やマラリア（三日熱）に罹患しての苦労もありました。いろいろと当手を振り返って、第三乙種の貧弱な体で何と軽機を持たされ、二度のかすり傷を無事に死神から逃れられたことは、家族の武運長久祈願の賜物か？と大いに感謝しています。滅多にないラッキーにも恵まれました。昭和十九年十月十一日、初年兵受領のため松末中尉、信原曹長と私との三人が六中隊より臨汝鎮を出発、一カ月の期間で内地へ帰りました。和田山町の実家へは予告もなしに突然帰宅したので、家族は逃亡して帰ったかと疑い案じたと申していました。私はラッパ手も兼ねていたので、この期間将校当番とラッパ要員で内地へ帰り、皆に羨ましがられたということです。

初年兵を連れて兵營から駅までの行軍では、私一人のラッパではいかんと姫路所在の各隊より計十人ほどラッパの増員加勢あり、勇ましく行進出来ました。懐かしく思い出します。

昭和二十年三月二十七日、河南省内郷县城付近の戦闘で、第六中隊は内郷占領の一番乗り。尖兵の尖兵分隊にいた私は、飛行場へ入ると、空の要塞B29の残骸があり、大きいのに驚きました。ゴボウ剣を抜いて翼に年月日と私の名前を記念に刻み、おれも大したもんだと独り自己満足したことでした。その後、西門の歩哨に立ち下番で隊へ帰りました。ちょうと運よく鶏の料理とチャン酒があり、たらふく飲み喰って御機嫌になり、水筒に酒をいっぱい詰め込んだままでは覚えていたので、その後正体がもなく眠ったそうで、夜中に非常呼集があり、ラッパは吹けず、呼集に行けず、大変お叱りを頂いた訳でした。

いろいろなことがありましたが、昭和十九年七月二十日と昭和二十年二月十一日兵精勳章を付与され、ま

た昭和二十年八月二十日、善行証書付与との連隊長榎林太夫殿の証明書もあります。

復員帰宅した後、大阪の印刷工場へ顔を出して復員の挨拶をしましたが、上司より食糧難、住宅難であり、いっそ国元へ帰ったらの助言により、また父も老いて仕事も怠りがちとのことで、退職して田舎で農業を父から引き継ぎました。何とか食へることは出来ました。そこへ戦時追放令が出て、町の役員連中が皆辞退して若い衆に譲ったため、私もその関係で隣保長、農会長、区長と歴任し、ただ今は老人会長をして毎日ゲートボールに精を出しています。

復員帰宅後一年の昭和二十二年四月結婚、女男女と三児をもうけ、孫五人に恵まれて平和に幸せに暮らしております。

従軍中はいろいろな人々にお世話になり、戦友として貴重な年月を苦楽を共にした大切な絆を守り続け、さらに大陸の戦野に若い血汐を流して護国の鬼となられた英霊に対して、ご冥福を祈り、毎朝合掌を捧げて

おります。

## 北支独立山砲第一大隊 軍歴で得た人生态念

福島県 青山 忠之助

大正十一年三月二日、福島県河沼郡会津坂下町に生まれ、昭和十四年三月二日、会津農林学校卒、同年四月一日付をもって北海道庁拓殖部地方林課に勤務を命ぜられていたが、現役入隊のため退職しなければならなかった。(兵役は国民の義務であるので、現役入営は退職となる)

翌年、仙台の野砲兵第二連隊に入営、陸軍二等兵となる。入営をしてから軍隊での体験で心に残ることは、軍装を支給されたが軍靴の大きさが左右違うことである。軍隊では足に合った靴を履くのではなく、足を靴に合わせろというのである。また下着はパンツではなく褌である。私はパンツを履いていたが褌は持つ

ていなかった。やむを得ず、同時の営の隣にいた戦友から褌を借りて着用した。

軍隊では喇叭うらばの合図で起床し、食事し、就寝するので、喇叭の合図のある以前から準備しては命令に反することになるという。従って起床と同時に着装し、点呼場に到着順に整列する。遅い者は営庭を駆け足をさせられた。そのため靴紐を結ばず駆けて行き、並ぶ場所を確保してから紐を結ばないと順位が遅れて駆け足をさせられることになる。これで機敏性を養うことと同時に要領を自然と覚えさせられたのである。

軍隊へ入り先ず覚えなければならぬのは「軍人に賜りたる勅諭」である。これは必ず暗唱しなければならなかった。軍隊には教育資材がある。教範・教典などの書籍がある。

不動の姿勢という基本の姿勢があり「気を付け」の号令で、日も身体も絶対に動かすことの許されない厳粛な姿勢である。

「上官の命令には絶対に服従しなければならない」、